北窗瑣譚

1 5
1389

イ5
1389

北窓瑣談抄

北窓瑣談ゝ梅華仙史橘春暉著所ゝ記巻ゝ

たゝ初ゝ

亜魯西亜の人ゝ仮天ゝて日輪の火をとり煙草吸ゝ

日ゝの人ゝの指の火をとり煙草吸ゝ

不審ゝるゝゝ又ゝゝ人ゝの月を面白ゝとゝ

称ゝゝゝる月海乃いゝ形ゝれゝバ

ゝゝゝゝゝの事理窟の上ゝゝゝ

あれゝゝゝ人ゝ碁盤ゝ方ゝ

ゝ憐ゝゝ碁

昭和二十年十一月十日
田中穂積

賢按ヒイトシハヒイシノ誤ナランカヒイトシナレハ二音ヒイシナレハ一音〳〵

は華陀の和名抄の漢に出入り附ハ是も大石火矢をつゝみ放つ
その形ちき羅を帯ん和漢の人皆出る事〳〵新字字彙
唐人よ向ひ通事よ人〳〵石火矢の事ハいうぐしゆどと郭し
にヒイトシといふと答へし和人の耳よハトヲヨントみゆる
ゆへ人よりて其形容の変ひ移ふ事なるべし諸ものハ
しむべし
ほとんどものこそまるゞはやまちとも引出るもの人の志とも
くゞき物をもそこなふ酒より出ることを多し三年をき
まぢハ結むべ文ものゝ人されど月の名花のはゝ〳〵さら
形り牧き友よ対むりひ志あやうく物語るべきもの

ひとものなくてやいはりべき
味噌汁ハ其後世の物〳〵唐土よハ今るあるとり〳〵日本も
庭化の比より〳〵後よりはゆ〳〵内の所信ハ味噌汁
を用ひ〳〵国事れし但汁よりミそのまゝまて食利
ようるるいむりよりはる事也今の汁〳〵ほのぐく其
作食ち物也味のよ作古ハ味噌とまて上の書なもく
末のゆよ従ひ多形り後世はちてひのやよ従ひ
まるハ是もはゝまち陶〳〵そ内脂可濱名志摩ち
が物語なるべき
伏見稲本町の書物ち大石因幡ゆ山科に至り比形〳〵行

通ひし所之あれの書つ比まで いまゝ数か珠り居て
絵しけるに妓女六数十人をーゞ子ぶそーゞめ伏之よ来り侍
しに比ハ大石の約通ひし 無屋法師のといへるまゝ拙作
町市一の大家なれ大石の舞の伝まて承侍るくむるしれ
ゝ拙思ひ出れてゝ高重法師の七十余のとし人なり
しゞ俳諧を好まて俳名を有輔といひ子もんあくや
せ一此法師毎日来てゝ大石をも毎々
よく見て舞も多くせしかよ事せり大石俳名
ウキと謂しそれ多くゆゝ皆ウキと記せり其ゆ
の義士も大石と共に来りし人くこのみも多く

珠数を毎の物語りしそれ法師の子と毎度来ての
弥あるに物語り大石の契りし妓を久方といひ
その父方よ大石よりの約束しに三弦もあり又唐琴
硯もあり三階座敷の脇の上あらんまゝ山科より
伏見迄の在山の絵を写し彫刻するもあり大石
改よ江戸へ下りとせしおよ此掛上まて敷千の上天
井の板よ感慨の辞歌を書て淋漓たりし其
天井をはゞよ珠数を取て此て井と夜放し
屋敷のあく造り掛して法国よ之せ物よ書ゞ絵
は誰人の所為よあれ其後法師も死去侍

本所も年々おとろへ毎度の橋も毀ち変へ孫よ橋本
町弥〻び年々おとされれば毎度よろし現三位杯も皆敷〻
よ変掛ひめ書橋なぐるも大工のゆゑ弱り居て毎度
の橋上よきれば懐古の情ぶらぶらしに毎度のよ孫さへ
今は絶果てて橋本町も一軒も弥〻びちひ失せ年々の
系と形りしらぶらのうちよ移り変れる欲を面も余り
ゆゑ平度変改年々諸〻いろ〻書橋絶よ
二三年ゆ進人ゆゑ建三セしうど昔の伊もゆゑも
毎度ゆ余程の大ゆゑ二階の移ゆも悔を百年
余もゆゑて三四人ゆ欲携へなぐ欲食の物ゆ

古疑当作百

情実疑当作精美

拾ひ〻べきほどなりし事ぶ伏見よ住しこゆいうれ
金〻うし
司空図が新〻解吟俗赤俗舞歌偏癖
伊の今のめく情伊よ所〻しは終よ古に五十年ばく乃
年〻そ今ゆも西国ゆ地よは皆伊ゆ日本ゆ米穀家国よ移れて情
圏伊ゆ〻しとゆゆ移よ日本ゆ米穀家国よ移れて情
実形れ伊も一人味原〻く碎年し基〻しゆも後
伊〻年〻唐人ゆ彼国ゆて人よ移れ〻上ゆも国
伊〻年〻ゆゆ本ゆ伊ゆて彼国ゆ三ゆ一ゆも欲乃ゆ
碎年ゆとゆよ多度伊〻程赤城〻ゆ唐人年

六十里つまり彼國乃家數諸めくりもち年
老多り數百里の大海あり調くるひのあひだのきし
程なり些て狹くしとりくりなり二三年も彼
國まて渡海して年ごとに飢食の事なくて
まくをに年毎に海を渡りあいぬるすべいなる
事人りなの飢を食し調れば彼國の飢を食し
難く事人に海を三味噌汁にのみ味噌けるく
事のあるくいとのるまりなのるまて粮赤味
世事計のにすう六十餘より乃ぶまで年に渡り
まりてりなの調ぬまば惜くくく渡海をし

此もりなの米味噌の乾をとりまの食をしらど久しく
渡海をされば高麗より食味を奏をあるまやうより人目
の惜るのりて常にもりなの物のミ用し難く雖
高の乃より渡海をとりくばそ惜きうより一年ままの
食物成携くなり用ゆうより人目すも之びよられば
死をんまでも日なりくなりとりくを年
引りぐき渡海をうとそで詳より米味噌渡海の和
新りなの物なるまを高麗より出ぬをうより出すき
事をもくびれ渡海乃陸味成食り求りもたる
ものしのべし

ゑ言字誤ナルベシ

俊之の首人尾茂三郎伯の句

まるとれむ紙のうるさる桂玲の形

其角が後琵琶形といひの影まて十五夜に酒を呑

出てうつの月と吟せし十五夜まて待のきざせるをいひ

とりゆる入金生をそしうつの月の五文まよる冬夜

を写れ絵図のれとうつべしを出ての数百文を費言

一芭蕉やい加べし

世の人の弊事の病とうく世俗ど伝ようく人地楽

しうぶ都のそはしくて事分とうしく夜ゆく

蕉を比はるやみ之人いは大方い恵なるとうつべし

時病て死ゆ人も亦ひろう唯危けれど危角生迄い

来人こそよろれと新山貞伯が常よ浴うし実と

で思ひし

予世ようの業現往ようく来しむ老をえうう除ようく(完)

業を退り根よ小袁を入ま常ようこうぶよ人ーて

備花咲外ようあれむ其花を坊を指をて咲ーもう

事なしいうぶうあよ花を指をはうるうや花の

香現生ようあるよこそ常ようあるまでも生ひるし

土ーよ事るうあるべやとつ其人答ーう花を

多く咲ーもう外いこそ業ようみて善ようを事其し

あるを実は葉はもとよりの花を開らーむるなり
といへり事是を聞て金子家の多くの情まし世の金銀
を実るまでして富を設を表らす財を費して其彼を
もるるなく財を費して家完成いと形むるなく財
を費して称徳をむさぼるれくるして居る皆
よく富を設て事ぶ事を図欲をるゆへ金銀
を得て是用ひ志のまゝなる事をもの世をんが為
なるもし志をも百姓して不自由なゆんまあ
和ようの金銀なくてんをひまく形まよいとうび是業
を植花をえざるを似くるびや

三河の伝右衛門川仙老の物語味方が原の軍前年
を物語る都しが武田勢陣形まるとやて死て返せ
しが土波あの浪人後藤某老ゆの武士と成へしま
尋ねく敷正味方原国ゆ本ゆんと必定討死を
べしと矢とうて花のゝ人ま多しと思ひとうて
戦ま陣人て弾の結の結ひやういまぐあり死し
て後ろ矢貴法知ぐぶらも敷ま嘆まんも口惜く
思むぐくるみうぶ思ひぬとりまで陣岡を為
ひう後ま此るを付へて誰も形ととまぐれと矢時
演松の弓矢倫まくーと戦んせーとそ

貴を成して賢者多し故に藩侯紀
州侯の熊澤先生を待遇し給ひしを傳聞華山公の仁
政東涯の二先生は徳川御代の山崎先生より
招ぎ水戸光國公の舞ひ入れ給ひ門人口授あり
をきし比より五十年の先生学問を伊藤松山侯
学問ひ給ひ其子孫も居吉藩三万石を給せるが
殊に先生を尊び其國に招き下し給ひ百姓に教
諭せしめ平度君招られ人事を伺ひ給ひ外
先生二人の子孫も執政の子孫なる故仕へ給ひ
養ひられしは彼の封土人事の子孫二人の子孫

ざる者多し依て彼の人数係る其上に主人の
なれば凡そ千五百石の執政の家老といへども
多く他の家老の外中の法士彼せざる者多く
いろいろ申出るとも志決して
意を曲し先生も其用ゆべきまで表向
聘れの使者を待るべき限まで定りしにもこし
おり帰るの時に及ぶ不幸にて
先生今年卒し其使命を不受果ぬ熊澤先生
病死の事なりしに殊に多きて平伊藤いろ
又まほしき事なるべき又西依義平先生をいろ州の

伺井侯敬祝しかし彼国（招きかゝ）時も侯西依
先生より旅館（入落ひて後先生を城中へつれも
倒こ京くの文面）も出自筆にて西依先生と称し
敬れ申かり始の比時彼を給へ〜れ〜事ありしよ
伺井家より定紋付〜うしうば先生失礼を咎て返
セ〜侯罪を謝して不良い今よいうを為西依家
の定紋を深く付彼紋物〜又揚二の西門武門
先生紋曲京の大久保侯祝を厚くして招き申し
侯こ〜〜邦外まで迎よ老人のうれば〜〜
侯の母公より先生〜紋巾紋ばう〜遣て給〜

侯の前といへども先生〜て許さる常に侯のお
まて論語紋講せられしは先より上席より坐し侯
次の席にて学生ひしをおるの者侯の書を傍よ
聖問きしかば先生講を止むいうといつる僕を揚
ア人の士民也唯聖経を講ぜるゆへ上席より
侯も聖経紋学給へ百人の学人なる
〜〜侯弱年にて学問なしゆえ〜〜
去紋問く事紋能ぎ〜〜や失敬の甚しき也もん
まて聖経紋学ぶ人の道なれんとて既年
おりんとれ侯為に謝し堅くとて断る又講ぜり

又上杉侯の細井甚三郎先生より師をえらばせ
給ふに三郎先生乃ち又言過の責
侯宮井小一郎先生を甚重の士山内宮之助氏
へいせしめ甚頼みの志ありて伊切丁寧庶
人の子弟に甚師より教めらるゝ文学に佐東觀の
時より伏見の旅館より別院に住をえらく先生の
百姓次郎富三郎の事に礼こさるゝ礼
甚厚し又金庫氏より大隅氏新し侯の
後見すれ藩広すれい弟の先人に祀後の教養
三郎先生他地より招かれ師をえらばれ教高
き又天爵の表一郎先生大隅より客ゝ付弟子
して学をえらび公子の多くは大人新人といいしより
公子時代先生大なる弟子なりて甚信より義高又河川
幾中侯東觀の席伏見の旅館より招て吉田兼好先生
に招きえゝ次のゝまでこれゝ送り迎して
学問のる老人のるなれどもあるもあらず又
平戸侯の岩川文侯先生より招るも辞とせず西ま
つゝとして言学を倫り淡ぐい不敬罪のゝ
されば仮れも情べき事れ礼言学の人ゝ賢に
礼し事ゝ西生の何に十歳きるも

王充が論衡に大山の高き天に入りて雲を生ずるを見ずと云ふ
百里にして堆塊を不見といへり唐の里程は後の
日本の五町に当る故なれば百里は十里ばかりを
離れてハるゝ程と成ゆえを思へば日本にも山高き国
なれば富士河内の二山其外諸州の石高き山々皆雲
を降すをもとらへ云へり
張横渠曰天下事大患唯是畏人非笑今の世の
人かしがましきもかの志もなき老生庭砌のゆもとるなく
学問なる打異なる皆小事なる人の非笑也人の非笑
畏るゝ故に高傑の士も賢志の非笑を畏れて世
俗の非笑を畏るゝ事なかるべし
朱子曰孟子に士終身一僕を去
ずと雖れ先生此を以て士終身一僕を去
ずとも人すれも云人を事家の礼義厳敬して庶士もかく
日本の君臣の義厚しき事を感心して庶士もかく
ぬき仇に成るべし明もかく不甲斐なく亡ひぬ
きものとと歎うる
日本の武士常に人ごとに一万一の事あらば君の為に
身を討死をべしとひたすら一命を思はんとの心
ありひ迎歌は倍事を考へ国を保ん事を希し君を
忘れ道を辱人事をなすべ真実に君を愛する

の形ひを顧ず志形し此ずに市今の儒者まち文人
笑ひてそしりて日本の武士も思すて大死をのミ恨び
君を忘るるの人をも忘れ唐土の人思へられば死をも
惜のび憤をも押へて死をば一定命をもなの孤まして
形ばかり〳〵あるし幾年のうりてなりとも其事を形し
あらわせて功を立り人名をし程嬰杵臼伍尚伍子胥
などの事ずとも知ひし合すべしとり〳〵に今二途を原
く考へ見るに儒者文人の論甚功やすてりかる論
の如きのうも学問の形ばかり国を文弱の風にうて
士風衰へ俗よい生ぜ貪り利を金人まる事のミを

人まのけく所をも忘れ高貴のごく威行事をし
誅まる前に討死をる事計い匹夫の義く似ること
いへた甚だの禄を食して甚だの事に死をる人なく
そこ忘の事よい而もあまた不忠もあれ一命をみく其
君の恩に報ぜば甚分一分の君臣の義よい遠てり
ゑべ〳〵ばやすく一命をさくなる程なるべ甚余のてよい
いうなるてもそ人〳〵の智勇の程〳〵忠勇をて
其事に廉恥をゑべうべされば士てうたい生れ出
ず唯ひく〳〵て〳〵万一のるゆ〳〵べ君のるおよ命を
捨べ〳〵人をるる事也此地の人をたしうす

知て而て後よ始くゝ家四て各この名義のそし祇
も知るべし 誠よ伍子胥などのごときいかしきすてい
なしゝ父死をるよりゝ又れば揚る事万こなれども
其子を智る家高傑の質なゝば其の事しゝ
石を栗藷の人すして伍子胥の改のこと学びが少
生をたゝ加を云るその石人をかべし世るる事ま
れ庸の人い百人すして九千四五人すて才智揚れ
高傑の質なるい彩の人の中より後る一二人を
ひろしされば一統をてうきの人をるを討死のるを
本一とんでし 此一段伍子胥老女人日すてい容るの事れ

ゝるりくども平素国恩に深なる士民義事なゝていい
伍よい出事ゝるき事ゝ唐土の人寿夢すて及度
貳人の臣多きい君臣の義平まふこ可しゝるべ
ゆへかべし
其山夫義拒兵ゝんのうゝる家くゝ子を見る今
の者ゝ考めて教の為ゝ苦をており
年四十ゝ人ゝ以ゝ年ゝ一人の男子を設
けの婦い苦めゝ子ゝ男子い姑免るゝ事ゝ成長
せゝ子のゝ何をきねへ何ゝなるべきゝ色くゝすお
ゝひはべくゝるゝ我方なべゝいと程をきゝる成

かくあるうまも見ひ、死まる事よと猶り家を造りて
おのゞ分れ老行くとい云へるまてひとゝ形ゝ子の者ぞ
行ゝとゝまぬ人を子孫相ゝ伝かくゆゑ
のゝ人

茶府検校といふ琴師常よ中せ〳〵い人のおすて
三絃琴弾くるを宝の物人よ色くの人きれば面白く
ひきゝく茶〳〵きん〳〵とまるゆやまちも他方の人の
人ゝ計へ〳〵はすの人れ人ゝ不付されば家い少つすても
何人のゆゝふ前すても我相前の藝琴茶道一ぢい
ゝ弾て何も平生の人よ学ん人とは相ゝ成唯神的

へなる細ゝまるなゝ人ゝ行て弾ゝ弾ゝ弾ゝ雑き
検校の人ゝ付上ゝまの名ゝ居ゝのゝもむなゝうゝ
の藝ゝまゝゝ見ゆゝ人ゝ行べき事ゝぞ百人の自省
君度と宗ゝ〳〵まゝ慎猶ゝいゝとも付人ゝ自身
ゝなゝ〳〵

有徳廟の時吉の机の言葉ゝ法ゝ寺尋ゝ有ゝ机の古
法ゝ其用ゆべき人ゝ座ゝ足を延ゝ足先を立て
平生首の言ゝなゝ養べきゝ人ゝ有ゝ
天子ゝ有ゝ赤ゝ有ゝ奥ゝ家の中ゝ奥ゝ人ゝ
新拵ゝ朱ゝ〳〵ゝ人ゝ必ゝ法れ有ゝ

今の住吉明神の文明記住手義家の像を出ちるものを
ちるふ武人見て画けいとしく出来たまども義家ふ
よハ不思議といひしるる明記義家とよハ武志樣ひと
いひすを知る給へといひしそ我友宗母義の先人
ゆて明記古実をも知わるとも義ぞしそ宗母
の物語なりき古書を武志樣そて大形家を作り
て家を志めしに奥歌よ入らえくられのやうる用ても
ゆうるるそ
それらなきう思ひつのぞよ時ふいれるハしの月の
歌ふとを後ふふ我古書友佐手本出ちる文のち昌ふ

ち昌はしく後ふる付歌思ひて事も手付生毛
へてば我古今集ふ武歌なとるいぐざるべんや世
おくれ付ものれば付しくも我思ひたる杉果ぬ(ぎ
いとをとの事なるといひしそ
梅正宗ふ従ひしに武士の中ふ大塔宮芳野の奥
の出戦ふ合ふ飢ありひて出雄義ふしといひを
聞りて一命をすてて戦ふ除む武士の願ふ二日
三日食せざれば立て物程の事ふ難ふ成
ふるる形といひそれば正宗を顧て彼武士を
みうみ おのもい形原の逆き紙食ふるるもなき

常盤ゝ生育てる男之幸ゝ隠む去の損中空虚
ゝて小偏き雖きゝ紙知ゝ如ゝ廉ゝ之我供乃
中ゝ無ゝ計ゝ之ゝ高ゝ中ゝ
寛政二年申戌冬 紙図裡事新ゝて異ゝ幸ゝ村
弾弼の社ゝ用なゝて去社紙求免られゝ
隠岐の国造ゝ彩ゝ村ゝ偽ゝ社ゝ弾弼の社
ありゝて去ゝ隠岐ゝ社ゝ出ゝ
伝ゝ去る異ゝ幸ゝ前ゝ去ゝ社ゝ紙
用ひゝ去て幸源て写ゝ違ゝ社ゝ
国造ゝ彩ゝ社ゝ朱塗ゝ庫を彩ゝ

其社を以幸矢の去面目を施ゝ国造を京
の氏ゝ幸も釈奠之ゝ令を云ゝ平ゝ宮角
ゝ隠ゝ社ゝて八角の稜ゝ下ゝ方ゝ音宮ゝ
普通のゝ平面ゝ弾弼の二ゝ彩ゝ洞の去ゝ
ゝ之ゝ実ゝ彩ゝ年ゝ彩ゝ去ゝ形ゝ去ゝ彩ゝ
ゝ去ゝ音ゝ彩ゝ去ゝ国造ゝ彩ゝ幸成性ゝ
住ゝ社ゝ神弾ゝ社ゝ神代ゝ今ゝ彩ゝ
弾ゝ彩ゝ彩ゝ社ゝ彩ゝ人ゝ
播磨の盤渓禅師毎ゝ人の求ゝ庭ゝ法ゝ
ゝ社ゝ彩ゝ彩ゝ彩ゝ彩ゝ

弟子罪科をかうむり暇をたまはりて出家せしと聞
しに実ならぬ事なりとてゆるされてゆるまぶらしが武州明石
の医師某薬を師匠に伝へて毒を行ひて毒をもて
人をころしが人より訴への事を頼まれて師匠にも
相談なしにかくしてかくしたる件の
罪科の人くだられぬ弟子にて探し求らるよ
人にたづねさがし僧にて医師も頼まれる
事なれば不届なる朝より弟子まで
よりて罪科のを求る毒用又不届もの
ぬ医も数日逗留遂に捨ても

ゆるされず中さ次の日も同しく探し求きども
又ぬ弟子も出ずして後よりけん紙を貼り作
事容易なりしと毎度中をしがかの師匠ぬ
唯人数を求むるといひて行方をきく又不届の
日さ取りても拝弟子大勢探し求るに小棚の奥
よりぬ求め出しあ師匠はをんてしく
沙汰もよく又弟子の修行底ハめ氏ものすを
医も是成仕て成んし成男逗留の豆ゆくと
よ後ことゆるあ
墨の中をもき比唐土の書よ多く用る字入絶氏

知不足斎叢書の中孝經跋の所に日本にも能
奥羽とりふ事見へたりまた兵法とりふ書の
中段なる日本考に其地九州居西為首陸奥
居東為尾と云ふ奥の字見へたり兵法ハ明の
唐順之纂輯る書なり
秦の趙高が云ふ事あり断而敢行之鬼神避之と此
八字真家傑事をなさん人の語といふべし中心一疑
を生ずるより種々乃妖魔起りて事の妨を
出来るものなり
真田安房守昌幸病重く成りける日次男左衛門佐

幸村を呼て問て曰此度天下にて如何すべきや幸村答て云
勢ひ安きに似たりといへども終には必ず東西戦争の
事あらん安房守曰其事左思へりもし其人左様の
事ならば汝は東に従ん乎西にくみせん乎幸村答て
恩顧重ければ西に従ふべし東勝ん乎西勝ん乎幸
村云東強くして西は條に謀は大なれども以て諸卿を麾が
ぬし安房守云汝も亦将家の子なり西に従はば必一
方の大将を承るべし我れ先汝がいふごとくなれば出て
従ふとも何の益もなかるべし唯恩義の為に方を敗
となれば自殺して死せんも実なるなるべし西をし

て傷しむるの謀を思ひぐらべ幸村曰幸もた思ひは
ほれ謀の思さん西郷ん仰せ新しい大人を重
かく安房守思ひ此して曰汝碁る劣あるを笑ひと
幸村為てもうでも敵を防ぐ策を思ひ出るる
なし父の病の間をうかがひ碁策をもへども
幸村日夜おりいをこし考るるらへども字治頼田
の橋を引く出張をるよう御の御を出るを
て父の病いよ〳〵重りうるを〳〵なれば幸村泣
て曰幸村不肖字治頼田の橋引く出張をるよう
御の謀を思ひもたらく橋を引て出張をる出いるば

て試死して義をうるを知る大人〳〵を防ぐ
策ひ〳〵新しい策を弱して幸村をして思ひ出
考をる試ひもしよ橋へと再三作て歩りしうば
安房守汝碁ある先ようく合点いゆくまで碁も
を多年鳥ひて漸く一策を思ひ出るる字治頼田
の橋を引て防ぐるいと策の小児も皆笑を知る
たとへ汝碁あて防ぐ我とも謀と大石の義卿よりも
劣嘉しうるべし唯碁ぐ一策とりみを汝一軍を引
て考腹が東の三年く陣を敵を防ぐべし笑ふ
外東を防ぐ幸ひ〳〵いづとしりみ考き腹東の

志平〻一百倍の大軍を幸村がいさこの少一軍すて
防ぎ戦ふすいかれる浮説から安房守忠てさん
ばこそ喜〻喜ぶ〻ばとていと不機嫌なりし
うば幸村いよ〻合点ゆうぐ父の病中の遺語ありやと
ありくば他のすれ正しかりければさるふても父の策の深き
子細もゆうんと肝腎を砕て思案されどもほどされば
又父の前の跡きかつこうりてそこの胡城尋ぬる安房
守の父て此策を某も合点ゆうさる策泥もぞや
原大名家康知深き大名すて敵りんとする対多て
必ん策既定て而して後は進む人なり多ひた

らば西軍の字治瀬田の橋を引て出張せんとは兼て
より定り存る〻べし敵将の兼て思ひしかけし
図る如ば東軍旅を動ものはより日を急ぎ在を
信して在をこまるる大浪の渡るあく成べし
不日は既分く義を支人さを将先出るべうばかり
某が策は孤軍を以て廣野の志平を出迎ひ事なり
家康公いうる所知るなり先志田こそ志雄ぐ東平
打出ることゆばば思ひりかけ事すていうなるかはん
もし味方の内内意の志ひるう又彼廣野すて敵を支
るる仮ば西軍の利なる事やはると不審疑べ

彼が一疑を生じ、あバたと人を嫌ひ、あるいは
合点ゆくまでいみじう教へ合せべうべう教へて
こりうゝ病をなぐゝ称して途中より帰り
十五日も廿日もかゝるべし我れ彼を細作を入く
子細探り聞くべし此時こそ天下の人東軍旗を
掲げ、こゝいそぐと自を開て見るべし我が子
病をなぐゝ称みるべし天下の人も疑し天下
の人疑ひ故大閤恩顧の大名を見れば第一味方ふ
人を通ぜる人も甚多きゆゑ又いか
程も策ゆるべし此策も合点ゆるなるバ

彼も合点ゆくまでいみじう尋常のうゝ彼人我れ
先に知り居て平黄金を与へ雑一とあるとなん
野人の談極めて実なるゆゑまでけるど是ふの
彼をそかり我れ計る術此程あきまもゆゑじ
泉州堺の医に半井宗もとりゝる人あり今より三代
代のおの宗の名医の名高のうし或は一老医多り
て其村のものすべて子の病をまゝ第りなること
いひしらば宗の所へ行あいかゝ病なるべし
問に彼潔高に我子登城の時ゆゑて雑
儀にいり也京元の時薬を与へ給りて此曲を治し

ゆゆしくすと余儀ゆゆしく積みかさねば宮ゆゆしく思事
人ゆゆしくして茶を多くゆゆしく調合して白ゆゆしく強き
中子なる老丸怪て病ゆゆしぬ者を先生の茶を白
玉ゆゆしいうとゆゆしく宮参して京と医薬分れば
ゆゆしくゆゆしく油手も鶯舌の石ゆゆしく考ゆゆしと謂ゆゆし
皆思ひゆゆしくゆゆしくゆゆしくひゆゆしくゆゆしく沸けまば
されば我ゆゆし時脆を乾ゆゆし茶を白ゆゆしくゆゆし常ゆゆし
唾嚏出ゆゆし盗人の業ゆゆし叶ゆゆしゆゆしゆゆし謂ゆゆし秋ゆゆしの春ゆゆし
なり

漢土五帝福禄寿の図ゆゆし陶朱ゆゆし周文王南極ゆゆし人

を用ゆゆしゆゆし暢暢（本ノマヽ）鹿亀三物を重くゆゆしゆゆし
三白の図といふ事ありて雪中の梅の蕾を重く
ゆゆしゆゆし月五本の梅を重くゆゆしもあり
丹後田舞ちよう三里ばうの四季の講尻とゆゆし
ゆゆし医王寺ゆゆしゆゆしひゆゆし寺のありしが其物語ゆゆし
五ゆゆしゆゆし紙弋多とゆゆしゆゆし物を元代今年京ゆゆし上りて
初て見ゆゆしゆゆし正月の門松も初て見ゆゆしゆゆし麻
上下といふ物も寿称ゆゆしゆゆしいひゆゆし詠ゆゆし京を離ゆゆし
後ゆゆし世五の里（本ノマヽ）教ゆゆして其質朴かくのごゆゆしゆゆし
日向国高岡といふ所ゆゆし薩ゆゆし飫ゆゆして仁王の七八百年

も葉の程七月終熟して頗る美味なる証とい
ふなくて婚礼などの宴席にて用ゐる事也ハ
庶民多くの伝聞の唄を語ふ事とぞ其ほか都鄙
の遠を見まく　重の厚薄なるもあり
伊勢の南の方の山中紀州熊野の東の山中抔
皆柿を影響うくて産業とん手多く殺多年
人いまだ知らざる者ハ稀なりとい
ふ人ありて又る対ハ数百の殺ども来りて一二の百
日間山の柿を盗ミ取れ人遠へども防ぎ切ゆ
柿の熟するを待て一山一村人云合て一日の百日皆

柿を取り尽すなり　俗説に曰ふ五雑組
茅屋人一家ハ多熟柿を集りて防くべ
と
二重切の花色今の世よい何方にも用ゐ花流なる
ものなれいと美しく利休の比ハ殺生ものすて
花のいけ方あるを用ひしかの殺生ものすて床に一人ある生
べ支物とは云べし
前の松前養書を著れ章に毛夷総領○北又
門鎖籥と彫ゐるあり実に他の人の用ひ
ざる所也

寛政の初年伏見に左京の比丘尼疫をみて久敬の
所にゆくに百方をもて下痢して屋に飲食も絶く
数日を経て及び倦ようにまぼ大に危き様なりしかど
年ぶりにまい精神もそこなくも病ましば唯その極るの
せるのみにしかるしかぶ数日絶食の後に三度の粥を
じても動もことをほぼ知てもそこに蓐上にこの比丘尼
そりし耳と鼻ハ様のものさとくなりて厨下ハ庭
及二つ三つも隔くるに芋百根の数のものに到るまでかく
そりハ何を煮る今ハ何を料理せるとをもて鼻をもて
〳〵ゆきあり常ハ嗅ものをもゆ

ゆく鼻を穿ものを経て経巻をもて又人に生涯
を隔てく等を隔てあて聞ものを低き曲に言低まで
分明にく今の病を言ひ〳〵今の曲を低〳〵なるに盲人
法師の律をゆ〳〵なる様に亟ゆ〳〵金くんく様〳〵
病にあるやみて余にあるなく故に所のゆ〳〵ゆ〳〵
所にてしかぶ所は数時にて病疾飲食常のあく
聞にあるて長鼻の香臭をゆるるも常に異なる
耳もそこあのあくにあなりて中く盲人法師の等の
様をゆ〳〵人のごとくに精妙なるゆ〳〵ばそハ金く
数日絶食して経空言〳〵無用法様にゆし

ゆへ神の走り給れるまうて身くるまをまきるゆへ
なり是を以て世人万事の穀を遊け茶根
本皮をのこさして血脈清潔ゆきはげ神業変通
して茶道なり
実政のたゝしめ主上内茶を好ませぬしゝ歩す
古さをのいけるころ内名の内流茶既まてそれば
内流法の内茶家とんうゝ宇治人新く追法を又
伝せんと仍ひすゝしく弱内墨思ゆうく次法とた
ゝ和を朕が料きんゝ朕より万世までの礼法
を被ゝ仰ゝ又彩ゝ法をんゝを中ゝんゝ実政

事ゝ彩ゝ高手こそ彩ゝ茶の内彩きて流茶の追法
中出ゝうなゝ法はきば世之の礼法も彩るゝそれば定り
の拍しを止もゝしゝそ白ゝ内茶るゝを止ゝて例
年の内茶法の内彩る内茶彩きし度ゝまゝ内茶
の内拍しばゝ内るゝいとゝ雑有重重の内ゝるゝ
なり
楠正彩皮あを彩ゝを彩ゝて世ゝなゝ
屋ゝも彩ゝ和名の内りの紫り故いうゝ法ゝ楠
公の子なゝと手茶の度ゝを吹ゝを通バ返ゝめ
ゝゝ

寛政の和柴野彦助先生拔擢を蒙りて東武の儒官
まのぞみ給ふ彦助国用ひて山陵大和巡行せ給
るゝ時　大樹公仰と彦助ら久しゆうまて上京
せらるゝなれば途中の話畫付て上覧ぜらるべきを
命ぜらる彦助辭して西国旅中たゞ一首のみ是にても上覧に
仍もいと尤唯和歌まの外一首のみ是にても上覧に
入まこゝろゝやと伺ひ奉りて出る命ぜらる彦助
別神武陵の祀に自筆にて出る
遺陵纔向里人求半死枯松数人丘不有
聖神開

帝道誰教品庶脫矛流厩主像設專金閣藤
相墳堂重玉樓百代本支麗不億此處何無
培坏皇
寛政四年冬十有一月陪臣無位柴邦彦謹書
大樹公上覧まゝて陪臣といふなる事にてそこ
をこしき桟橋あり
嵐悟まゝ〳〵て芳蹟しのひそぶ柴子美王室
をゝゝ心事を抓〳〵ゝることを日光山をおし返て厩
王の法隆ち義我の多武峯を移も所をある
やゝまえゆ重の重を省くい茶　大樹公の西征を

孫なりしとぞ
年ゝ友紀伊の家中雑賀九一郎祝義ゝ孫義あり金乃
象眼彫すて吉田左市の常之のもとに上る浅塵の
二ものは象眼すて（真田の流きり）
字多国次すて一文字吉廣なりけりとて名高き象眼ゝ
て入ゝゝ吉田幸村ハ武勇のことなりしかは浅塵の二
ものは孫ゝ今時の武夫のかきゝなりけれ
ゝ雑山より出ゝ伝来ハ一ゝ宝刀なり
半夏英連花巻ハ日本の産家国ゝ移れゝ
乾隆帝の時陶器を日本流ゝ造ゝ也今毒日本へ
伝度表の五ゝ六百五ゝ宗和五塗の賠償古百人前を中ゝれ
黒詰ゝ日本の五ゝとしてゝ家国ゝ移きて勝るよき物
なり賠償もな邦の制あゝ移きて れゝ叫（ゝ名なり
此二十四五年ゝ乾隆帝毎年の九十の賀の付色
彩表を造ゝ五塗ゝ高麗孫の戸陳ゝ名和ゝ
をな邦く孫ゝ市教所まて直の入れゝ
し塗ゝしてゝ移ゝ
ゝを孫ゝ孫なれば五塗ゝ移て寧ゝ塗ゝあて移ものゝ
高麗ゝすゝい度の出刈ゝ
いと孫ゝ入ゝ安永年ゝ対馬侯（朝鮮国ゝ移ゝ

乾隆帝く朝鮮王ゟ献上物のゟて京都の堂師
の彫物師長常（赤間の人種の父）八重菊の生ろ
ーを五枚丁字付くれ多り價五百金のゟてく
地金の珍物ゟいつ夜ぐ彫物の手寧長常一生の
精力を尽くて造り裏ゟ大日本越前長常と金の
象眼すて沢を入き殆ゟ造るとて甚だ細い千キリ
象眼すて年紀強ても板歯る幸形き手像の理不
尽ゟとそこれ不ゟ詠ゟ面目の幸形り
日光の戸帳ゟ五ゟ掛ゟ家国ゟ揚れく揚ゟゟき仕
方ゟ出れ天明の頃ゟ生ゟ陵ゟ来ゟ為し此茶屋の
カビタン役トサアカテフレンキとい（ろい甚だ邪の勢式
慕じ此茶屋飯のカビタン新屋を日本流ゟ造りて
住ゟ生そ其比の此茶屋大通り役者雄幸左衛
門はゟく此蘭陀を学ひて一屋敷をおき成ゟ
天二階を板葺て漆塗の格子欄干ゟを設ゟ
子も吉雄ゟく長崎ゟ長崎ゟ来ゟ
ゟるそく此ゟ茶屋飯ゟ分
腸を茶屋の数の献酬ゟ外の飲食も甚不自由な
事なゟし
寛政の初ゟく生徒ゟ毎ゟ来ゟ為し五匹九ゟ

唐人を日本の仮名を学ぶ者多く和歌俳諧狂歌
つゞりをもまなびしかば行末をも後の
之和語をも大抵よく日本人の如くなる者
も事多し)此事あり和学を好み和書を多く
所持せり人皆これを異流人寛政八年南
京に久しく逗留せし彼地にて振舞さ
れし(腕拵平焼物のまで芋和料理これ日本
流にて殊さら一人にて彼れ人をもていうるる
仮名をもて唐土にて学問をば授さるるいわゆる
ゝゝ既に二十年計もいまゝ仮名にて調し唐土を

足一事のみ中一事号を論ずるのみ宝暦い
日本の年号に日本馬場信武が著周易指南おの
足くこうと引こうるあり三四年前信武の
指南書唐土に伝り所にて彼方にて後こうしこうく
多り此年前さくあり新沢や義園ともに大平に
久しいまゝ時宜月々に開こうるおてをや
一とも伝信金山の仮人参川字集とりの人上書をこう
微意有て勝れふさ一つうるで金山の事をやて小金
を掘る事既業にもるりの必平信房を多して死
たるやきい三年五年迄きも七八年十年を経過して

灯火の油烟重複

死をぞうはなしとて千病を被国まそや一ケとしよりを病始
ハ咳嗽出て面色青くなり舌の苦味をて出り飯
なども黄胖病のごとく自身をして憔悴し常の歩行
も健ならぬ国ぐしあり所形なる出来ハ戦ハを年計すて
限り羸瘦して死に至る病多き人も金なるなし
とて薩州の金山にて病をへつへとしよりを咳嗽の
苦へつへとしてつごとし故に所をとを云諸国共に
金銀洞掘を掘る者よい皆此病ありを焼火の油煙
火の油煙和し都て毛人の咳嗽に引きて身よ
里入る〻師曉の穴に平油烟粘重出るゆへ多出る

無熱ハ無頼ヶ

事なり此此より此事故出る人いかなるぞ死の病の多
出る事故知るゆへ賃銀拾限を基ぐ言事人貧乏
甚金銀もて大石蝶乳喉咽口論ふを出れ悔ぞ況
多の人の命令をも用ひぞ至熱の悪か事多
合ぐ〻ぞ考計なりそいうまきてる〻年多年
此病故治出るの方故考ふる全民薩州の国より
一方城ぐ〻り多よ医結よ記事○又金を掘穴を
佐原まそへうと方穴の中の働く場所をミキと云其
一ブよ名の居れり出金を掘る穴を青銅一ブ
とを又名銭一ブとしてあり是より金出る佐原の

方言にまぶの大なるを盤と云ま盤一ブとはまぶの
穴なる所之其ま盤一ブ甚深く曉穴に入て奥に至り
て候場り出る事に及ぶといふされば穴の深さ半日
程ありと聞える○金の蔓ハ根深くのり至る物なり
銀の蔓ハ浅く浮上りてあるものゆえ金の蔓ハ白きえ之
此蔓に堀當るバそれはるに偽ひ金あるを知るべし
此蔓東西に引かのりても南北に引事あるとも是を天
の運行に引きて延るものゆへなるべし○穴深くのれバ
風氣強て燈火滅せ其を微に絶すそケ乃へとらふケ乃へ
まるなりより奥にのまバ人の呼吸も強て死する所有

入る事叶ひがたし金多くありて強て入んと欲せれ
バ重に土器とて灯ん盞を横に多くのて土器三枚程
火をともし火氣と火氣をお掛してまりやる事なる
まゝ三宝荒神といいて一つ土器に火を三つともし
火氣お掛まるやうにまる事成り猶大強て深くに入
ぐつしあるなば上に向てそのかく穴を穿て煙を通
し或ハ横さまに隣の穴に堀抜て氣を通をしむべし
穴初より隣の方に穴もなく山も高くして上にも穴を穿
難き時ハ添煙とてん升て穴二つ並て堀入る添烟とはソ
ヘケムリ出しと云略なるべし 穴の中に入 灯火むつしも

栄螺殻より火を焼してなりしかいいくわうを振出しても
自由まあって油のこぼれざる事竹の柄を付て折入
なり牡蠣油菓いんこに花ものりこ○山の薬病人はい
甚温補の薬を忌む美人多くなどすれば用ひ時々
ずくこれをもとめ○金を掘り古穴くくなれば
穴ずるより黄泥流出くく落ちる毎に餅糧のあく
不ずまのあくよ○ある是を伝聞てスホウ石と云ス
ホウとい蘇木といひ事あり赤ちゃとらんまて
かくてとそ物也其の色黄褐色なり薩摩の
西まてケイケなどいひ新まや薩摩のキチまはも

不大ま吳なり○穴の中まい金を掘る者の外ま穴の奥
でき不まて未まそらくを作りて法不まへる大工あり
又底深く入りる時ま火多く出て困難きゆえ
をこの生涯を就骨車のもきまのふてあるこの上の
物徒なり
筑前の貝原先生京都の付いまぐ年を考く原
玉ひしらば打ち言い源京の書物を抜びて小紫を
いり大丈ま拵り玉ひしが拵らまの年限過て陽の
対小紫為を惜しみ己が姿を強ま宮し姿こそ
論ま小字をし中くくま通ふんと苦ま及ばしと一首

の歌を詠じ出すて貝原先生を訪ふんとせるを小学
姉婿郎吉雅貝て先生を訪ふ人生を終身の人まれ〳〵ぞこゞ
〳〵も一言をおくんと筆の上て
西契のひくて はすこの海まめく詩あるとんを
そそを人こそはそれまもまゝ切のし先人を男
短歌くしきハはゝ〳〵じと我のミ切りかもそぞ
古の佛刀自静抔実ゑしといるんも庵わし
宮はゝ〳〵の〳〵歌清んん命ゑそ〳〵人もそ〳〵
切り〳〵ぐ西く京くいく〳〵の目る塔ふはん
京橋

貝原氏よりの

太の文書唯一対出るまゝのいく〳〵出るれど書とも
又〳〵べし今る西の吉雅が歌の廣東の切を吉雅
廣東と称して名和と名の茶人の袋も形〳〵く
もてそ〳〵し金書の太の日実とそるもゆへ名文
よハはゝ〳〵
佐雅宗廣が歌は書氏京教まて人を名をそまて

家もゆかしく甚幼子は宴あるを興をそのこと日夜家業
祇園町のおびゆるもして家業のるをも忘れられば
毎度釈尊涅槃の上宮は高々と勤行をすといじ
しに文栄庵小雅く茶店をしまはるる途中
係の夕立すとと降る軒端に雨宿りして居るに
ちぢしまれども雨も晴るるれば間もなく十二三歩ば
うつ女郎の出く新洲くして雨もの晴れ
ちづしこまくく入まいして晴るを待ちあ
き間入腰掛くく茶屋烟草なとえそく出るれば茶
屋娘ひ茶屋おまただこあど春て義経のまを祝

又ある灯籠乾元の横く樹木の枝ずしめうば和
静すて又ふ茶くく誰人の住居やとはるしゆうしく
笑くく居ちくく又物うして茶の中女出てはうじい女の子に
はへいい笑ほうも幸を通ひし居ちに居余る面白
ひひ囲ま幸釜も麦居ちで苦しうしば思ちで
暫けかく入くセかひして居茶すとも石上てまひひんや
と謂しく茶屋りとすう茶むの茶屋なれば囲の
横枕も又まわしく移ぶ出発を茶ぶべしそ間まのう
無和ふう地獄釜の五人合まで人ぐけ五ちまで入れし
て屋まなくうまはるしのめ出くく横枕も容色の美

麁なるはいつまでもこゝに家のたゝみま）氣高くして
たゞもいとゝこの強情の氣まゝ世よいかしる女もいる
ものゝゆゑと却すじあらるゝ如て自ら茶を点じて
出れまをおさへ拙くそ一入ゆゑ氣味よくこえて好まく
のこゝろも時くうれど一れして居りぬ第居ゆくく
段教ゆ富しらゆ世間よ偽りよ拙しんゆしたり去る
まてもかゝる業人あらば我ゆ及ぶるゆゆゆゆゆ
ゆゆ孤の氣をたゞくうもまてやゆゆんと中んあらず
頻よゆ代も新をぞる景を問ひて彼ふをえて来れ
よ居ゆをもゆて来れとゆめられむゆ代せんゆ

なく白状して實ゆ恵且形の出来完なり彼妻人
ハ名家吉性夫ゆ為ゆ我をきこゆ生ゆ居ひて
彼所ゆかこひ童ゆ人ゆこゝといひれば第居大ゆ
驚き我子のゆれまひゆも居ゆ我さへも人動ゆ
かゆる女ゆ妻ゆ具しゆうれ砲等ゆ何ゆもとして
我ゆも者ゆ迫の妹ゆの妻とゆゆゆゆと
で使性のゆ喜くたゆ迫ゆ今ゆを芸ゆ孫孫ゆ
ゆゆゆ

芥子花を植ゆゆ居ゆハ十ゆ年居ゆゆ立てゆ和
ゆれバ古き居ゆゆ芥子花植ゆゆ性美ゆよゆ引

まづきりのとぞ何の業とも出でる事なり
河川幽奇其比九流の中に引續き茶人迄も一流を
なす程なりし武州蒲生氏信の河川の茶人富田
ふを中ごろ及だれ出でなる者なり
ぶと弱くて中ごろ行れしまこの河内の名物の飛
武蔵鐙陰太刀等まで飾り付て入れ
しうげ蒲生家まき不申候きまい世茶人のまえを
渡れしまふ河川名人(武蔵ととこそ人)
以茶人もいと多きなるべしそれより茶道数
種工夫を凝ひしとぞ其人の名を語り伝へ

形ぐ和業を名手なる樂あれども淫を慎といひまもなる
べきまでなるべく其比の名高き茶人(大名)(藩主)こそ人
まて今世の俗情基しき茶人と共大まなる
京都所不の四樂地あり方の四緑の屋四築地も中まい茶
れこしが特く造り改めまして丈古き茶室の
築地を元拵へ中ごろ易あるべき基なくして
人夫駄しくなる詰合の日雇方損失きしるなり
しとなる作り所西涼寺の築地も基まえ丈作り
和土を大釜まで入よく考て土を塗のふぐりを抜く
解て築地に作りとなる八土の生事を詳

絵をしめ筆本の生ぎうを為へ恪のあのうすて解ハ年うる
土うまりうを見ハ幡城断切などの伝ぬぐうきこ為なう
文ゆへうこ今まりうこのぐうくうこ又ゆ
光中人うを京師地下歌四天王と世ま称まるい沈月芦庵
大王蒿溪なう
年〻唐土へ金銀の為うきうるうと上すも恪をおゞし
ゆして唐人〻心ま不可ま人へ金銀を持まるべーと
命をうま)ゆうる以和年中ようる令銀九ま唐土すう
年〻なを邦へ持まるをうはなうめ銀も六ゆ貫目
受合へうしが平数ゆ先年海うく千度ゆまり

唯今うま持為うまるを銀金の物後なうき令も
インスと称して純金年うま持為うまる千国をえ
しが赤豆抜云印記ありう令殊ようし是も以和年号
よううまりうまる持為うまると金産の人の物後
なうし
法度の国武を励ミ野卓なりハ上ようきく生玉ひ
て孝きを為へいうまうまる形るべし一旦文弱の風
形まて兼為の風俗流れうる国ハ安中国強兵
の術施しべし
後ゝ下ゲ子ハ振て考へとい事あう諸ま下称の

老翁はよは法てす法はよう西洋よ倣ふべし砲はも
法およ慈悲を施さば必分上下して後ニハ罰きざ
れバやまざる根よ為ものゝ砲の恩恵を反てゆくとあす
ま一上ゝうゝ人ゆて下級の者の罪ニ泊めやうる
まゝきすゝ国家の事独を即ちそ又ゝくのめく
為べし学ゝるの所伯陽先生生ひて国政今ゝ
朝鮮の為ゝ法ゝるよ先例の野卓武術を設めて左
をゝ為ゝ れ義務遠慮をすゝしゝるひそれバ朝鮮人
大ま怪し對物ま百人生ゝうとゆたしゝるとも
その後数年をるて朝鮮信ま倣ま新をいひ

はのゝ或八年不仏郎ち人参等も然茂子なゝく
原理つくあを論じて年ゝま論該むりゝくあり
大ま本邦の利ま為ゝるるれ事なゝ論ま八ゝ
法ゝす卑卓武ひの政ま先伯のめくゝ今ゝぎれバ首
を別人な邦の人の命令を用ゝんバ利教もち人ど急
角の理非を論ゝん岩厳ゝきゝ所やむるを以ぞ
朝鮮人ゝ忘れて伯ゝるも先伯のめくゝと流ひまゝく
事おゝく世話もゝ学ゝしま西洋先生ます形ゝいま
原理を論じゝゝむゝるるなゝ柄他ま移ゝり
されゝ下級のゝと夫独ゝ侵ひ方ゆゝるるる

こそ
常陸比叡とも云ふべき宮なり板倉周防守京都所
代なりしより久しく大津に政務をつかさどる半ば
中使をしてかの地の中より人を撰び彼半ばれ
打殺さんとせしかの京大津よりの使者
ゆくてくそのかの代官を殺しなんとせ
られ合て石法をなすもまた夫なりおのおのしかれども
まり恩威をもて威勢行はれて後恩を行ふ威を恩
をもちて雖も恩威なくして恩のみ行ふ下
ものなり

唐土にも法乃質物をもて段より分最上の物を西洋質
と称して唐土より西の西洋に天竺意機利を
イスパニヤ阿蘭陀のもの価の高く上品なるを収ど
あと中ふい唐土にて高ひとを下品を東洋質と
称して日本に渡るとい日ない事で価の下品な
物を収ど所なり
後世大名偽起る事なり拾里拾の程でい
ねとうくたりや鼓あまり甚だしき戈を
ゝる鼓あい三都共に人々及ぶ事なり
只後ゝる隆ゝ二三千年まるざるる鼓あ事蔵の

おもうに異端の徒まことに多く碁を善くし西行
一休頼朝の兼などいへるも碁を善くしたる事
しるし雅楽寮の楽人なりしが上京
ぬし一統よりこれ微妙なきいなく一流変遷して人
寿為目盲耳聾の事なれば中人以上の仮初
も戯まじくまもるものなり
七年人皆といふるに行きて至誨翰よい雅流
碁多し三百人五百人に及べり宝和の石田碁平
といふ人いまだ碁を弟子を堵庵
といふ俗称を名乗事と云ふ堵庵の門より

大に行きて門人碁多く法師より出て誨法も碁も
二三席を誨翰なり碁勝負のるまて世益ある
誨翰なり坊庵の市子道二といひて門人又師手
勝りて大に行る三教共に其学問を開く常に
人法を学ぶ者を学問を奉人舎くと雖ども
四五ケ所ばかり四人ばかりなどの耳も入あく法ゆ
ゆて孝貞忠信のより家業高貴なる産候物
農業耕作の事に至るまでまをくさあるゆへ
まで中ばしき家内も門誨教学しより家居もり
まーくなりえ人も小四人も又毎を学教をる事をえて

手習出精さるやうに成りし事常に喜ばるゝ
及べり但其事はまだ幼稚なる故に頑愚なる似る
事なり是おし去の俳の筆も入るゝ唯一通りの
講入い事穂広帯すて大丈世義を助け人百姓を養ふ
ゐ不の学ぶ形り
老子い手をく解なく解し易く難し易学が
一生世を変不の人間も老子の中も成而石持
生而知有とゝ白を云れば家ゆも
待つべゆゆる待ば人の恨を買つるも形し自然
ゆ志も大ゆ動き為ぬ恨ゆ為ゆ成白の功法

基夫形り後世る同志の人行くべ世秀べし
多くて年の学ぶ如れば米きを市極美つゆ
許へ待る中ゆて年お織人石をつくべ美
つ米五斗を使るゆくへて直しる定家が力の程を
又きんとて石をこゆる別てこそやも
友人星池和歌詠史ゆ頼ても数千そゆし
中ゆ雪原の蓋皿を出るさんなれば花雕で員行
強禄で勝
古昔い遠歌すて和歌をしる多し俳の発句香
味噌大臣養ゆきゆきて中ゆ出りゆて美ゆね

もう時雨とやをーに大臣殿元あくぼみうの京をや
るて来つゝん 鬱陶の国より行脚の時石のもづら
板家根をきしき居るを見て 猶が板屋をつまぐ
るがうつゝ点ひるるその石月を洩て雨いとゞ
れとおりしまぐと分くゝ 宗祇伊勢より行脚の時
小児の来るをえてはるくゝ 猴より怪くゝ
よりとも謂しる少児えうりて犬の孤如法師
来つれば犬くゝ 万治の禁裡光上の時佳れ谷
変れ男女を呼うけ 孤ゝ呼るるしらの犬
よと宣ひしる清れ谷て猶も鳴ばと分玉ひ

那山茂くゝ二三代ゝ家の茂ゝ人を清友の和歌
の序つ人 変れば武付上京の序より走るよ おと
雨かゝれば五月雨ゝ 雨ゝ こゝ来れ天流ると紀
しるる 元行くぐ 所のこゝろを探る物也ひ
と分くゝ もしる
宣旨ゝ 元ゝ 土佐の國より唐船漂流をえ
武士 行向ひ唐船 唐船より 乗移り 呼使をーるる
追風吹れば急ゝ帆を上て 沖出りぬ 人々の 仮人を捕め
出られしうば 甚作ゝ 捨 雖く 土州より 各千年の程
米 武積 行 大船十艘 陸ゝ 手るして 唐土天竺 市ち

奏の浦に送還を願ひ奏しかれ日本の国に法華
の浦に差土使人を遣はし唐船に流れ来るべきを
願ひ出でられる莫大の費用まで出だしたるも他国人の
外にも功績の人の事なれば流れ来るべきを
流通に出だされば紀州熊野の大島
より文元の使人紀州へ渡来して数百
艘の中の引舟まで長崎まで送りもてきたる
また彼法華経を出さまし十艘の大船を呼戻され
しる内に無事にて出でて無事に帰りきた
和国より漂流の船を以て使者を以て彼船中の
の人数人を陸に上げ人質として彼方使人
彼船中に乗り移り以使者を乗せ
両国に入港の者べき事なり
また寛政の和蘭前に唐船漂着して彼国にて
味の上唐船にお遣なるべしば出船
べしして順風を待て彼唐船に乗り出船
出船を生命れば一日遅れば出されば時の長国
をふ待出船の船まき縄を切り捨て西をさして
去りぬ出船遅きを遅れしうども大船に帆を上げる

るなれば少あまして押行よりまた退けかつ暫時の
間数十里おくれたりしかれども力及ばざるにより
に其間三人の兵隊を失ひしをもいとそび唐土
て退行既に唐船を失ひしをもいとそび唐土
まで押行しに一日計りして船を止めたるよ
沖中に百里余も船出して手なれば唐船も等を
ゆりて沖のりして居たれば彼唐船後押
舟三人の兵隊共に唐船より先鉄をん
て帆柱を切りたり力の柄よりまをうみ日の丸指し
急き漕戻すべきよしをのたりたる唐人七千余

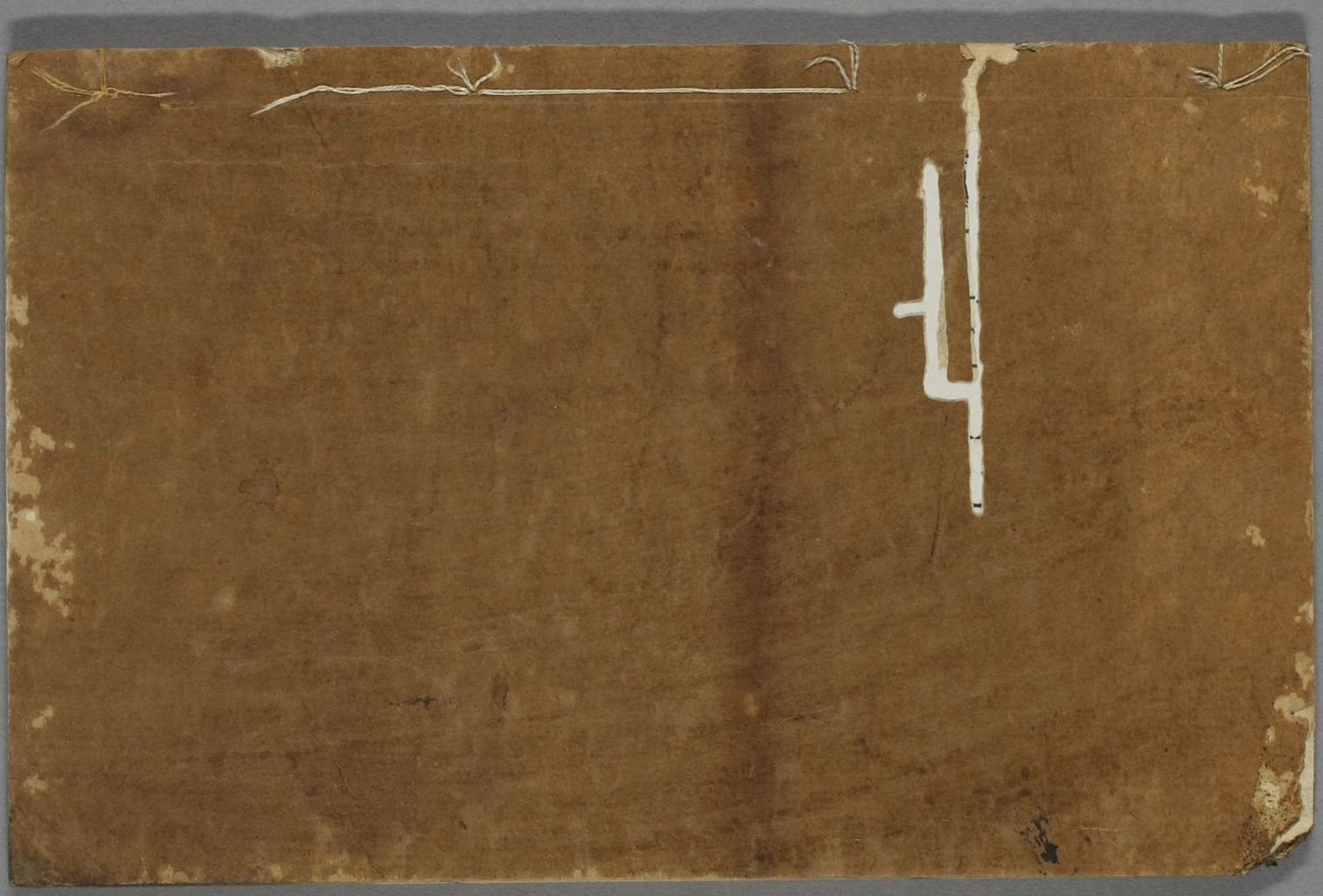
人を組出し大船をうしろ三人の勢よりあまたく
まどうたる流前より漕廻はれば其後法のあく七隻よ
送るまで彼兵隊三人い南方を振しよ柄日の
規模なりて後日丸立られしとぞ
薩摩の足軽五人江戸へ飛脚として五二足よ
を負せをよりて五人たを掛して流前出屋敷の
松原を通りなる小五五の石手なれば使つれて
刀を差のよりよ差出程差計を帯して五上よ眠りし
よ既よ来まも五ろ比時多まして打負し時使十
俗人よき旅人へ帯へ退剥をんとをを差りし打

長なれば彼乖徒の荷物すさしの長くる刀をもすり
仕遣ふ指さうに長き眠きる足怪を丁と切る足怪
一大刀切り遣なぐり拵えを抜く長すり乖徒
十余人の徒をおそふ蒼くる切合ひ遣ふ長人を切
倒し数人ふ紙負きられば怪法た而付して乖徒
いろう足怪も数ケ所の除ふ負られば倒き孤し長き
長を捨て切ふ人ふ乖徒長多り長く回れば
足怪遣ふおそれ居しぶ長人ふ長荷物を負ぶ
捨て乖徒の足怪除ふを負倒き多り大ふ長ぶき
各〻の抱しいふ如ふ長ふ人ふ長ふ長荷物ふ

法用の出物ふ長を徒ふ一大事ふ成る
時の為ふ人ふ乖徒の事形れば成るの荷物を
も戈料して徒ふ再び乖ぶる先ふ一足も動く日限
の切迫ぶる板ふ時を捨て江戸人行再び
いふ同ふの足怪ふて長ふも動く成時を遠き業を
為ふ成ふ又捨て行雑ふれば先の宿ふ遣ふまで
いふを長ふ負ふ入ば仮ふも毒刀を帯ふる者の刀を
徒ふ奪れていふ成金ふ長ふ徒ふ目前ふ徒ふ人を
切倒し長ふれば長ふ屍の形ふんるを長ふて必ふ表
の内ふ再び乖ふ成ふ其時を待ふ切死を成ふ

とりくび同人の兵庫侍小年の家来を又捨ていえもの
時用なりとて此場を去り難しとあくに助太刀すべ
きとて多員なるいひて主君と侍小年とはれら
重き此荷物の間よいい物が出切の時用有るべき
ものゝ是非此二足の下を切獲し日限の切ざり抵
よりはやく先こそ家が頼しと理を尋ねいかゝ与様
をなすべひ同人の兵庫小人仍ぬ果して表立て
同勇屋を死んとて情使等悪しまうえる飛脚
傷迫れば死ぬうと侍をく家下を部上りて切
付うり切やまぬ刀を奪へる城を切るうり出勝る

撃て知去られば刀を死所して此ぶ所次の者より同
人の飛脚を変すを仕て数十人走りて別次の者
引取り品東堀ちく注をしたりれば藤市庵より
出医師外を数城内さなさん事を立て数百
人平家を撃同ちめる深手ものしうども急所
を離れ走られば程ぬく乗金しうり此る既る藤市
より薩ナ仕出れれ此れの使者を立の仕者
まりて薩ナ連為手柄を重く書き此彼同人
の兵庫侍小年の二大をいる立用なりとて又捨
ものゝ後病の通りなりとて切腹中付きたるとて

薩州の義弟の強きるゝ人なりし
年来の福俗も老ぬとて京へ帰りけり道中盜賊
迯い其金を奪れ櫃抱へ云わけもなく云甲斐なく
京へ帰り付て法よ迯面しをれる時のうく苦しの侍を
侍まじ其際の神まもかく所神戸白川京の人中
て大き盛んしてんあきんと侍へ京の人高合も
老ぬ人金動をし孫なる也老と成ぬ国をり余り
書ぬ人の物侍をり

北窓瑣談